

暮らしやすいまちづくりに向けた取り組み

宮城県大崎市市民協働推進部まちづくり推進課
佐藤敬美

1. みやぎ大崎（ふつつ共和国）の紹介

大崎市は、平成18年3月31日、宮城県の北西部に位置する古川市・松山町・三本木町・鹿島台町・岩出山町・鳴子町及び田尻町の1市6町が合併し誕生しました。

人口約13万5千人、面積約800k㎡と県内第3の都市となる大崎市には、産業、学術、文化、医療などの都市機能とともに、東北新幹線や東北自動車道、東北本線、陸羽東線、路線バス、国道4号などの高規格の交通・輸送機関が整備され、東北地方の縦軸と横軸を結ぶ結節点となっています。



東西に約70kmの長さを持ち、江合川と鳴瀬川の2つの大きな河川が育んだ広大で肥沃な大崎耕土は、「ササニシキ」や「ひとめぼれ」に代表される良質米の一大穀倉地帯です。



みやぎ大崎
ふつつ共和国

【大崎市のロゴマーク】

大崎市のブランドシンボル（ロゴマーク）は、「自然・食・文化」という大崎市の魅力のすべてが「ふつつと醸される」さまを表しています。大崎市を代表する「鳴子こけし」「ラムサール条約登録湿地の蕪栗沼や化女沼の渡り鳥」「鳴子温泉の風呂おけ」「緑（自然）」「山盛り飯（米）」「酒杯」と変化する豊かな自然、大崎市の広大な空の色を表現しています。



日本を代表する銘柄米
「ササニシキ」「ひとめぼれ」発祥の地



42万本のヒマワリが咲き誇る
「ひまわりの丘」



御本丸公園のコスモスと近代化
産業遺の人車



秋の空を彩る
バルーンフェスティバル

2. バス路線とリテンション

本市のバス路線は、「大崎市公共交通再編の基本方針・整備方針」に基づき、本市と周辺市町村を結ぶ「広域路線」、市内各地域と古川地域中心部を結ぶ「幹線路線」、さらに各地域内の日常生活路線である「地域内路線」のネットワークにより、効率的・効果的な交通体系の確立に向け再編を進めています。

このうち、「広域路線」「幹線路線」は、古川駅を起終点とし、通勤や通学、通院等の生活の足となっています。



【市が運営している路線】

□ 市民バス (廃止代替バス 8 路線)

古川線・清滝線・高倉線・宮沢真山線・松山鹿島台線・三本木大衡線・鳴子線・大貫線

□ 市営バス (鳴子温泉地域鬼首地区)

□ 地域内交通 (合併前の旧 6 町)

松山地域, 三本木地域, 鹿島台地域, 岩出山地域, 鳴子温泉鬼首地区, 田尻地域

□ グループタクシー (古川地域 2 地区)

大崎市の「広域路線」「幹線路線」「地域内路線」の3つの交通ネットワークの維持・確保に向けた取り組みとしては、市民や事業者等を対象とした講演会やワールドカフェ会議、これからの公共交通を守る子ども達への交通教育を行い、公共交通離れを防ぐためのモビリティマネジメント事業を展開しています。また、利用者が多いほど公共交通のサービス水準が向上することから、未利用者の促進を図りながら、バスやタクシーなどサービスを提供する側の後継者育成も大切にしています。



<公共交通講演会>



<ミヤコーバスでの交通教育>



<シャトルバス試乗会>

3. 地域内公共交通とベネフィット

地域内公共交通は、合併前の旧市町の区域内を回る生活路線として位置づけています。それぞれの地域の中心地にある商店や医院、銀行へ、あるいは最寄りのJR駅、そして、中心地域の古川への幹線バス路線等への乗り継ぎを目的とし、乗り合いタクシーやジャンボタクシーを運行しています。



<地域内交通運営委員会>

この事業の実施主体は地域住民です。地域が運営主体となり、住民で組織する運営委員会が住民のニーズにあった運行計画を策定します。「地域の交通を地域で創り、守ること」へ自ら参画することで、地域への愛情や役立ちを感じていただけたら、自己実現的なベネフィット（便益）に繋がります。三位一体型の交通システムが確立されるものと思われ、協働のまちづくりを推進するうえで重要な役割を担っており、持続的に運行される路線になるものと期待しています。

4. 公共交通とサステナビリティ

本市は豊かな自然環境が残るラムサール条約湿地「蕪栗沼・周辺水田」と「化女沼」を有しており、マガンやハクチョウ、ヒシクイ等、渡り鳥の越冬地となっています。蕪栗沼の周辺水田では、冬の田んぼに水を湛え、渡り鳥の休息場所を提供し、春から秋にかけては田んぼの生きものの力を借りながらお米をつくる農法「ふゆみずたんぼ」が行なわれています。大崎市の産業振興計画やバイオマスタウン構想では、この豊かな自然環境を守る取り組みとして、持続可能な低炭素化社会の形成に向けた市民活動を推進しています。

その一環に大崎市民病院では、これまで蕪栗沼の陸地化の原因となっていたヨシをペレット燃料にし、ボイラーに利用します。また、事業者路線の古川駅から大崎市民病院へ向かうシャトルバス

の燃料は、市民から回収した天ぷら油の廃食用油を原料としています。市内の事業者が精製したバイオディーゼル燃料（BDF）100%を使用し、市民のチカラでバスを動かしています。大崎市民病院のベンチは、市有林で間伐した林地残材を利用し、山の保全等に貢献します。

廃棄物を資源に変え、化石燃料を使わないモノや再生可能エネルギーを作り、利用することで、環境に配慮したまちづくりを目指しています。



<BDF使用シャトルバス>



<ヨシ燃料の病院ボイラー>



<林地残材使用ベンチ>



公共交通は、人々の交流の場としての役割を担い、まちなか活性化に貢献するとともに、渋滞の緩和やCO2削減など環境負荷を軽減し、持続可能な資源循環型社会の形成につながるものと期待しています。

5. 定住自立圏とコンパクト

(1) 大崎定住自立圏共生ビジョン

定住自立圏の形成には、生活機能が集約されたまちと拠点となる施設があり、その間の移動手段が必要です。大崎市では定住自立圏構想推進要綱に基づき、大崎圏域で中心市宣言を行い、色麻町、加美町、美里町、涌谷町とともに都市機能を整備し、大崎圏域全体の活性化を推進しています。連携する政策分野においては、地域資源を有効活用し、それぞれの役割分担の下、協働し、補完し合うこととしており、地域の特色を活かした施策につなげています。

公共交通部門においては、拠点間を結ぶ公共交通ネットワークの構築、地域住民の通院・通学、買い物などの日常生活に不可欠な移動の確保、観光客を含む地域外からの来訪者との交流の活性化などについて検討しています。

(2) 大崎圏域公共交通検討研究会

地域公共交通においては、色麻町、加美町、美里町と平成22年10月に協定を結び、地域公共交通の効率的な運行体系の確立による生活の質の向上を目的に話し合いを行っています。

圏域内の各市町では住民バスを運行していることから、ルート接続や費用負担等のルール化、その他交通アクセス、交通ネットワークに関する問題を提起し、広域的な利用者の利便性向上を図るとともに、地域公共交通に係る財政負担の軽減につなげています。

また、人員削減などによる交通担当職員不足や、公共交通に関する知識やノウハウなどの引き継ぎに時間を有する場合があります。そのためにも近隣の自治体職員が連携し、お互いに補完し合いながら事業の継続に努めています。



<大崎圏域公共交通検討研究会>

(3) 大崎広域圏の拠点施設

平成26年7月に移転開業した大崎市民病院本院は、県北約30万人の生命を預かる病院として、救急医療、高度医療を担うとともに、地域の医療機関と連携・協力しながら、初期救急から三次救急までを提供する地域医療圏の拠点となっています。

そのため、利用者の足の確保は広範囲となり、鉄道や路線バス、タクシー事業者とともに、ダイヤやルート、交通渋滞の緩和などについて話し合いが必要です。

大崎市民病院本院移転前は、市民バスのすべての路線が大崎移民病院を經由していましたが、郊外へ移転したことから、病院の移転開院と共に大崎市民バスの起終点となる古川駅から新大崎市民病院までの間、シャトルバスが運行されました。運行から半年が経過し、大崎市民病院本院内において、利用者にアンケート調査を実施していますが、半数以上の方が大崎市周辺の市町村からお越しになっています。

(4) これからの展開

本市は市域の54%が森林です。山間部では、これまでのように人が田畑の手入れや林業などを行えるよう支援が必要と考えます。動植物の生態系を保つことや、豊かな水源を確保していくため、山間部に住む方々の役割は非常に大きいものです。

大切に守るものはたくさんあります。しかし、全ての機能を維持するものではなく、共同で維持できるものは、定住自立圏構想で実現するのが、コンパクトシティの姿ではないかと思えます。くらしの足を守る先導役の自治体が、大崎圏域公共交通検討研究会の中では、お互いが最大の支援者であることが重要です。



<大崎定住自立圏関係市町>

6. 未来への期待とメッセージ

自動車を使わない行動に満足や達成感を見出すことができるのであれば、そして、その価値観に共感する人が増えるのならば、公共交通が見直されるのでしょう。自転車や歩くことで挨拶が交わされ交流が生まれる。自家用車離れによる渋滞の緩和や二酸化炭素排出量の削減など、エコへの取り組みへ参加できる。そんな心と体の健康が保たれる自然と共生したロハスな町がどこかにあってもいいのではないかと感じています。

しかし、現状は人々のニーズが多様化し、モータリゼーションが拡大しています。少子化社会の到来に公共交通の需要は減少するものの、高齢者のお出かけの機会の確保や観光客の交流の場をどのように創るのが課題となります。一人ひとりがちょっと生活スタイルを考え直し、地域にあるものを誇りに思い生活することも必要ではないでしょうか。まずは、私自身から始めることが求められています。

現在、大崎市に住む人々や未来の子どもたちが「ずっと“おおさき”に住み続けたい」と思うこと。また、他の地域へ転出した人々が「いつかは“おおさき”に戻りたい」。さらには、他の地域の方々が「いつかは“おおさき”に行ってみたい・住んでみたい」と思えるように、将来を見据えたまちづくりを行っていきます。次世代のためにも。



<蕪栗沼のマガンの飛び立ちの様子>